



【#7】手袋のオハナシ

Text by 小助川 駒介

Komasuke KOSUKEGAWA

きみがいなくなってから、

もう15日と7時間が経過した。

いま、きみは僕のそばにはもういない。

生まれた時からいつもいっしょだったのに。

離れたことなど、一度もなかったのに。

僕の心の中に大きな穴が開いている。

どんなに底を見つめても、そこにはなにも見えない。

日に日に、その悲しみは深くなっていく。

生まれたのは、中国の田舎の街。

あの街の音を、匂いを、風景を、

僕は今でもありありと思い出すことができる。

僕たちは本当にそっくりだった。

何から何まで、見分けがつかないほど。

僕たちはぴったりとくっつきあって、

長い長い旅をして、

そしてこの街にやってきた。

そして親代わりともいえる、

あの男のうちに暮らすことになった。

僕たちはいろんなところへ出かけた。

この街に大雪が降った日。

僕たちは協力しあって、

大きな雪だるまを作ったね。

あときは本当に楽しかった。

あの男が好きだという人に会いに

いっしょに横浜まででかけたこともある。

結局うまくいかずに、

あの男と僕たちは、

木枯らしの吹く山下公園で

遠い汽笛を聞いて帰ったね。

たしかにあの男は悪い人間ではないが、

僕は許せない。許さない。

君がいなくなったのは、

あの男のせいだからだ。

あの男が、あの夜、

酔っ払いさえしなければ。

君がいなければ、

僕に存在する価値などない。

あの男はそのうち

僕のこととも捨てるだろう。

今の僕にできることは、
どこかにいる君の幸せを願うことだけだ。
大事にしてくれる優しい人に、
出会ってくれることを、
僕は心から願っている。

手袋片っ方だけ拾った

尾崎放哉